

動詞「浴びる」と格助詞

山西正子

キーワード：「浴びる」「浴びせる」 格助詞「に」 着点 起点

要旨：昨今、新聞の野球に関する記事に頻出する、「金本に3ランを浴びた／相性がいいはずの奈良原に初安打を浴びる／多村に左翼線二塁打を浴びた中日・川上」（「朝日新聞」による）のような、「打者に3ラン／初安打を 浴びる」形式——以下「打者に 本塁打を 浴びる」形式——について考察する。「に」と「浴びる」の共起については、用例が多いとはいえ、確認はしにくい、文筆家の用法を調査し、以下の3点を仮説として提出する。

- ① 「全身に放水を浴びる」（用例（23）参照）などからは、「ドコに ナニを 浴びる」形式が一般的で、「に」に前接する名詞は「着点」であったと考えられる。
- ② 「観客から拍手を浴びる」（用例（31）参照）などにより、「浴びる」の場合、動作主は「から」で示されることが一般的であったと考えられる。
- ③ 冒頭の3例のような、実質的動作（ここでは「打つ」）主体を「に」によって明示する形式は、格助詞「に」の、「着点を中心だが起点ともなる」（小泉 保（1993）による）性格に起因すると考えられる。格助詞「に」が「浴びる」と共起する場合、過去においては「着点」が優勢であり、現在は「起点」も力を持ちつつある——少なくとも野球の試合内容に関する記事の範囲においては——と考えられる。

内容：0 問題のありか

- 1 「浴びる」の概要
 - 11 「浴びる」への注目度
 - 12 「浴びる」の類例
 - 13 「浴びる」と格助詞
- 2 「浴びる」「浴びせる」の一般的用法
 - 20 調査対象
 - 21 「浴びる」と「を」
 - 22 「浴びる」と「に」「から」
 - 23 「浴びせる」と「に」「から」
 - 24 中間結果
- 3 現代語の用例

31 現代語の一般的用例

32 ボクシングに関わる例

4 考 察

41 格助詞「に」の多様性

42 「に」と「から」の関係

5 ま と め

0 問題のありか

あるいは、もはや常識であり、異とするに当たらないことかとも考えるのであるが、稿者にとっては、以下のような、動詞「浴びる」と格助詞「に」の共起はいささかながら、違和感がある。この違和感は無意味なこだわりなのか否かを、確認したい。

- (1) (日本ハムダルビッシュ投手) 2回から制球の乱れを抑えきれなかった。ズレータに初安打を許すと、3四球で押し出しの1失点。3回無死一、二塁からは、ズレータに一発を浴びて力尽きた。

(朝日新聞2005・8・13朝刊 15面、以下「朝日新聞」朝刊による)

- (2) (中日平井投手) 広島の緒方にサヨナラの一発を浴びた。(2005・8・14 19面)
- (3) (銚子商遠藤投手) 1回、先頭の前田に遊撃内野安打され、1死二塁から深見に左中間へ適時二塁打を浴びた。(2005・8・16 17面)
- (4) (大阪桐蔭高辻内投手) 先頭の大石剛に本塁打を浴び、完封を逃す。
(2005・8・17 17面)
- (5) (楽天岩隈投手) 3回、小笠原に一発を浴びた後、さらに2死二塁となって稲葉に浴びた2ランが響いた。
(朝日新聞2005・8・31 21面)

このような「(投手が) 打者に 本塁打を 浴びる」という、「浴びる」と格助詞「に」の共起例が新聞でしばしば見られる。

(1)(2)、(3)(4)のように2日連続することもしばしばあり、(5)のように、1文の中に重複していることもある。もはや、(将来的な予測はしないが) 2005年の時点で、無視できない形式になっているといえる。

これらについて、稿者にはいささかの違和感がある。これらが仮に、「ズレータに一発を打たれて／緒方にサヨナラの一発を打たれた」のように受動文であれば、「に」の使用に違和感はない。また仮に、「ズレータから一発を浴びて／緒方からサヨナラの一発を浴びた」のように格助詞「から」が使用されていれば違和感はない。

ことに、(1)には「ズレータに」が2回見られる。前者は「許す」行為の対象＝着点を、後者は「浴びる」行為の起点(実質的動作主体)を示す。これは、よもや、レトリックではあるまい。

これらの事実について、客観的な説明が必要であると考ええる。

1 「浴びる」の概要

動詞「浴びる」に関する記述を確認しておく。記述は多いとはいえず、稿者の違和感の由来の説明は、簡単ではない。

11 「浴びる」への注目度

動詞「浴びる」が、問題視されることは多くない。

通行の辞書のうち、『大辞泉』（第一刷増補・新装版1998小学館）が「かぶる」との用法の相違を説明するが、ほかには特に言及するものは見えない。また『日本語文法大辞典』（2001明治書院）は「あう」以下、500語余の動詞・補助動詞を取り上げるが、「浴びる」は含まれない。「浴びる」は取り立てて説明するほどのことはないであろう。

12 「浴びる」の類例

「浴びる」は一般的には「太郎が水を浴びる」のように格助詞「を」と共起し、「他動詞」とされる。しかし、動作主体みずからが「水を浴びる」場合に限られる。＊「太郎が次郎に水を浴びる」は非文であり、「太郎が次郎に水を浴びせる」となる。すなわち「浴びる」は使用できず、「浴びせる」とする必要があるわけで、この点では、「着る／着せる」、「被る／被せる」などと同様の関係にある（ただし、「被せる」には対応する「被さる」があるが、「浴びさる」はない）。

また「着る」、「被る」との共通点はほかにもある。動作主体の意思とは無関係に「非難／注目を浴びる」があるように、「汚名を着る」「田畑が豪雨による水を被る」もある。この、④格助詞「を」と共起するが、他者に行為をしかけることは表現できない、⑤主体の意思とは無関係に、他者からの行為を受ける、「受け手側」の表現ができる、の2点において、他の多くの他動詞とは一致しない面がある。たとえば他者に「水を掛ける」ことはできる。また「非難を受け止める」のは主体の意識下の行為である。

「浴びる」はそれなりの問題点をもつ動詞である。

13 「浴びる」と格助詞

「浴びる」は問題視されることも少なく、また実際の用例も多くはない（と考えられる）ためか、辞書の用例も簡単に示される。『新明解国語辞典』（第六版2005三省堂）を、一部省略し以下に示す。

㊦＜どこになにヲー＞湯・水や日光をからだに受け、その影響を被る。「冷水を頭から浴びた／…略…㊦＜なにヲー＞避けることの出来ない何かを集中的に身に受ける。

「ほこりをー／一斉攻撃をー／脚光をー／拍手喝采をー」

㊦については、「どこに」としながら、それに該当する例文が示されない。あまりにも自明のことと考えられるからであろう。

『日本国語大辞典』（第二版2000小学館）は、「に」を含む実例を、文学作品から示す。

あたりの人の好奇心に輝く視線を残らず身に浴びながら（水上瀧太郎『大阪の宿』（1923－26）

しかし、以下の辞書は、いずれも、「――を浴びる」のかたちを記述するのみで、「に」は言及されない。また「から」も上記『新明解国語辞典』（第六版2005三省堂）の例文として「頭から」があるのみで、特に記述されることはない。

『旺文社国語辞典』（第九版重版2002）

『角川必携国語辞典』（五版2002）

『岩波国語辞典』（第六版2000）

『集英社国語辞典』（第二版2000）

『明鏡国語辞典』（2000大修館書店）

『広辞苑』（第五版1998岩波書店）

『大辞泉』

（第一刷増補・新装版1998小学館）

2 「浴びる」「浴びせる」の一般的用法

文筆家の使用する「浴びる」「浴びせる」を点検する。格助詞「に」や「から」との共起について確認していく。結果として、「打者に 本塁打を 浴びる」形式の、実質的動作主体＝起点を「打者に」として「に」で明示することは一般的ではなかった、との推測を得た。

20 調査対象

「CD-ROM版新潮文庫の100冊」のうち、翻訳を除いた、日本文筆家67名の作品から、「浴び」の文字列検索を行い、以下の数値を得た。なお、「浴び」が発見できなかった文筆家に限って「あび」の文字列検索を行って、参考とした。上記の67名の作品のうちには、文字列「浴び／あび」が使用されないものもある。「浴びる」「浴びせる」の頻度がさほど高くないことの証明であろう。

動詞「浴びる」の活用形	198例	動詞「あびる」の活用形	14例	計	212例
動詞「浴びせる」の活用形	65例	動詞「あびせる」の活用形	8例	計	73例
名詞「水浴び」の一部	2例	名詞「水あび」の一部	1例	計	3例

21 「浴びる」と「を」

多くの辞書が「浴びる」について格助詞「を」と共起する例を示すように、上記計212例の「浴びる」「あびる」（以下「あびる」をも含む）の大半は「を」と共起する。

（6）殊に入日を浴びた、月毛と葦毛とが、霜を含んだ空気の中に、描いたよりもくっきりと、浮き上がっている。（芥川龍之介『芋粥』1916）

（7）高速南下中の艦隊が、断雲の間から洩れて来る月光を浴び、空母群は十五度の傾斜で大きく揺れていた。（阿川弘之『山本五十六』1965）

そして、格助詞「を」を欠いていても副助詞「ばかり」「も」が共起する。

（8）「風呂なんか夏は大していらんですよ。私は毎日、水ばかり浴びてますからね」

（曾野綾子『太郎物語』1969）

（9）六條の院はこうおっしゃっている。『自分はこの世の栄華をきわめつくしたが、女のことでしばしばつまずいて、世の非難も浴びた。…略…』——と、ね。

(田辺聖子『新源氏物語』1979)

助詞を欠くのは、会話文における「を」の省略を除けば、以下のような飲酒と入浴に関わる場合である。(11)の「一風呂浴びる」は慣用句で、「を」を含まないのが原則である。

(10) それこそ、浴びるほど飲んで見たい気持でした。(太宰治『人間失格』1948)

(11) 真面目につとむる我が家業は昼のうちばかり、一風呂浴びて日の暮れゆけば…略…
(樋口一葉『たけくらべ』1896)

22 「浴びる」と「に」「から」

「を」以外の格助詞と共起する例は多くない。

(12) 見れば男女の農夫。…略…黄に揚る塵埃を満身に浴びながら、我劣らじと奮闘をつづけていた。
(島崎藤村『破戒』1906)

(13) やがて小糠雨を羽織に浴びながら、団子坂の文房具屋で原稿用紙を一帖かってかえる。
(林芙美子『放浪記』1933)

(14) 顔一ぱいに強い光線を浴びながら
(堀 辰雄『美しい村』1933)

(15) 夏の光線を全身に浴びながら
(堀 辰雄『美しい村』1933)

(16) 医者たちはいずれも全身に血を浴び
(開高 健『流亡記』1959)

(17) 軽快な日光を全身に浴びて私たちは
(開高 健『流亡記』1959)

(18) 四匹のにせ狼どもは、毛に太陽を浴びて、丘にのぼった。(倉橋由美子『聖少女』1965)

(19) 光秀は背に夕日を浴びつつ立ちつくした。(司馬遼太郎『国盗り物語』1966)

(20) 司祭は軽快な月光を、肉の落ちた肩に浴びながら正座していた。(遠藤周作『沈黙』1966)

(21) 月の光を瘦せた背いっぱいに浴びながら司祭は…略…端座する。(遠藤周作『沈黙』1966)

(22) 少年が吹き出たラムネの泡を胸に浴びた。
(三浦綾子『塩狩峠』1968)

(23) ワイシャツ姿で全身に放水をあびながら
(高野悦子『二十歳の原点』1971)

(24) 満場の注目を一身に浴びながら
(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』1978)

(25) 源氏は…略…総身に水を浴びたようにぞっとした。(田辺聖子『新源氏物語』1979)

(26) 源氏は桜吹雪を身に浴びて舞った。(田辺聖子『新源氏物語』1979)

(27) 散りかかる紅葉を身に浴びながら、灰かに舞う姿のあでやかさは
(田辺聖子『新源氏物語』1979)

(28) 青年は一座の視線を身に浴びて、言葉も出ない。(田辺聖子『新源氏物語』1979)

「に」は(12)から(28)までの17例すべてが「着点」である。

(29) わたしは四辻のほこりを頭から浴びて
(石川 淳『山桜』1936)

(30) (販売合戦は) P T Aや婦人団体からさんざんな攻撃を浴びた。
(開高 健『巨人と玩具』1957)

(31) 彼はさして観客から拍手を浴びることもなく
(開高 健『巨人と玩具』1957)

(32) 銭湯に入って、湯を頭からざぶざぶと浴びた。
(三浦哲郎『忍ぶ川』1960)

- (33) 頭から、さんざん砂をあび、それでも男は (安部公房『砂の女』1962)
 (34) 外灯の光を頭から浴びた彼の姿は…略… (新田次郎『孤高の人』1969)
 (35) 低くドスのきいたうなりを周囲から浴びて身動きならず
 (野坂昭如『ラ・クンパルシータ』1971)

「から」は「起点」であるが、動作主体と解釈できるものは(30)(31)(35)の3例であり、(29)(32)(33)(34)の4例は動作の開始点となる。

23 「浴びせる」と「に」「から」

「を」以外の格助詞と共起する例は多くない。

- (36) ほの紅い光を背に浴びせながら (谷崎潤一郎『痴人の愛』1925)
 (37) ベンチの上の女の上に臭い接吻でも浴びせて下さいな (林芙美子『放浪記』1930)
 (38) 禅僧らしい禅僧であつたら、こんな俗悪な叱咤を徒弟に浴びせはしなかったろう。
 (三島由紀夫『金閣寺』1956)
 (39) 焼けた砲身に水を浴びせて冷やしたり (吉村昭『戦艦武蔵』1965)
 (40) 和尚は、…略…女中にそんな言葉をあびせながら (水上 勉『雁の寺』1961)
 (41) (彼は)京子の顔に荒い声を浴びせかけた。 (吉行淳之介『砂の上の植物群』1964)
 (42) 質問を彼に浴びせかけた。 (阿川弘之『山本五十六』1965)
 (43) 一番機に直射を浴びせて (阿川弘之『山本五十六』1965)
 (44) 水を汲み上げると、信夫は裸の自分に水を浴びせた。 (三浦綾子『塩狩峠』1968)
 (45) 周囲の人にお湯のしぶきを浴びせていた。 (曾野綾子『太郎物語』1969)
 (46) 影村が加藤に浴びせかけてくる眼は、十年前の眼といささかも違つてはいなかった。
 (新田次郎『孤高の人』1969)
 (47) (母は)ものもいわず水道の水を下半身に浴びせ (野坂昭如『プアボーイ』1968)
 (48) 素手の学生に放水をあびせかける「全共闘」 (高野悦子『二十歳の原点』1971)
 (49) あらゆる窓と部屋から罵倒を浴びせられた。 (開高 健『パニック』1957)
 (50) 父親はあらゆる面で貶す言葉を投げかけた。…略…貶す言葉も正面から断定するように浴び
せかけた。 (吉行淳之介『砂の上の植物群』1964)
 (51) 小童から浴びせられる「支那人」という呼称にも、べつに心の動くことはなかったにせよ
 (北 杜夫『楡家の人々』1964)
 (52) 池本屋の小母さんから聞きずてならぬ皮肉を面と向かつて浴びせられた。
 (井伏鱒二『黒い雨』1966)
 (53) 侮蔑に満ちたことばを頭から浴びせかけられたら (新田次郎『孤高の人』1969)
 (54) 北の方は…略…火取りをひきよせ、大将のうしろからばつと浴びせた。

(田辺聖子『新源氏物語』1979)

ここでも、(36)から(48)までの13例すべての「に」が着点である。そして、受身文(49)(51)(52)

は、動作主体「窓と部屋＝庁舎内の役人／小童／池本屋の小母さん」が示されるが、文法的には「に」も可能であるにもかかわらず、「から」が使用される。

また(50)(53)(54)は「起点」を示し「から」が自然である。なお、(50)の「正面から」は「断定する」を修飾すると解釈すれば用例から除外される。

22で検討した(30)(31)(35)の3例が、動作の起点を「から」で示す「～から浴びる」形式であったことと、(49)(51)(52)の「～から浴びせられた(る)」であることを合わせて考えると、「浴びる」については、(用例はわずかししか確認できないものの)「実質的動作主体から 浴びる」とするのが一般的だったと考えられる。

24 中間結果

わずかな用例からの速断は危険ではあるが、これらの文筆家の手に成る文の範囲に限定し、ある種の傾向を指摘しておくことはできるだろう。以下、3点にまとめる。

すなわち、一般的には、①「浴びる」「浴びせる」としばしば共起するのは「を」であり、これは、原則として不可欠である。②ときに「に」が共起する場合は「着点」を示す。③さらに実質的動作主体を示すのは「に」ではなく「から」である。

43例の「に」あるいは「から」との共起例からは、「傾向」しか指摘できない。しかし、(1)～(5)に示した、「(投手が) 打者に 本塁打を 浴びる」のように、実質的な動作（ここでは「打つ」）主体を「に」で明示することは、一般的ではなかったとの推測を得た。「浴びる」と共起する「に」は、「浴びせる」行為をする実質的動作主体を示すのではなく、もっぱら動作の「着点」を示すものであった。

(12)の「満身に」以下、「に」と共起する17例すべてが、13で示した『新明解国語辞典』（第六版 2005三省堂）の

⊖＜どこニなにヲ＞

の＜どこニ＞に該当するものである。

むろん、「浴びせる」でも「に」は「着点」に徹する。(36)～(48)参照。

さらには、一般的に、受動文であれば動作主体は「に」「から」のいずれも許容されることもあるのだが、調査範囲では(49)(51)(52)において、実質的動作主体を示すのは「に」ではなく「から」である。

昨今の野球関連の新聞記事における、「打者に 本塁打を 浴びる」形式の「～に浴びる」に感じる稿者のいささかの違和感は、全くの「無意味なこだわり」でもなかろう。

稿者は、そして通行の辞書も文筆家の用例も、「打者に 本塁打を 浴びる」形式は採用しない。あえて書くならば、「金本から ライトスタンド最上段に 3ランを浴びた」とでもなるのであるうか。

3 現代語の用例

31 現代語の一般的用例

現代語の、一般的と考えられる例として、次のかたちがある。(55)は「CD-ROM版新潮文庫の100冊」に付せられた解説文である。

(55) (井上ひさしは) ユニークな喜劇を発表して一部の評者から注目を浴びてはいたものの、…
略…いぜん無名にひとしい新人であった。(扇田昭彦 1974)

(56) (今季限りで現役を退く初芝選手)「17年間、家族に支えられてやってこられた。…略…」
とあいさつ。スタンドから歓声を浴びながら、場内を1周した。(2005・9・23・17面)

野球の試合内容に関する記事以外の場合は、実質的動作主体——(56)は「スタンドの観客」である——は「から」で示す例が確認できるのである。

32 ボクシングに関わる例

野球の試合内容記事に頻出する「打者に 本塁打を 浴びる」形式であるが、それは13で示した『新明解国語辞典』(第六版2005三省堂)の

㊦<どこになにヲ>湯・水や日光をからだに受け、その影響を被る。「冷水を頭から浴びた」
／…略…㊦<なにヲ>避けることの出来ない何かを集中的に身に受ける。

「ほこりを—／—斉攻撃を—／脚光を—／拍手喝采を—」

からも分かるように、「相手の攻撃を受ける」ことに該当するものである。したがって戦争や厳しい対決の場面にしばしば見られる。

(57) 集中砲撃を浴びつづけた結果、…略…外城壁の破損は、もはや打つ手もないほどに絶望的だった。(塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』1983)

(58) 彼は、…略…機銃の一斉射撃を浴び…略…敵味方環視の中で水中に没したということであった。(井上靖『あすなろ物語』1954)

(59) 八名の者たちは、独房に留置され、一人一人呼び出されては、刑事たちの鋭い尋問を浴びることになった。(吉村昭『戦艦武蔵』1966)

さらには、スポーツの分野でも、使用されることはあった。ボクシングにおいて多く、「CD-ROM版新潮文庫の100冊」の沢木耕太郎『一瞬の夏』1981にも見られる。ここから、「浴びせる」も合わせて4例示す。

(60) 内藤の右のジャブをカウンター気味に浴びては、スタミナを消耗していった。

(61) 藤倉は無数のパンチを浴び、朦朧としながらロープにもたれていた。

(62) 赤坂に、内藤は左右のボディ・ブローを浴びせつづけた。

(63) 羽草は細かくフックを浴びせつづけた。

このような、スポーツ分野での、「相手の攻撃を受ける」ことを「浴びる」とする習慣(むろん「攻撃する」は「浴びせる」となる)の上に、昨今の野球の試合内容記事の「打者に 本塁打を 浴びる」形式が座を占めているのであろう。

4 考 察

41 格助詞「に」の多様性

小泉保（1993. 183ぺ）が端的に記す。

与格「ニ」：着点を中心だが起点ともなる。

このことは、しばしば観察されることである。

411 まず、対称関係にある動詞の双方が「に」と共起可能である例を示すことができる。ここでは、「に」に前接する名詞が、着点か起点か、動詞が示されるまで決定できない。

太郎は花子に絵を教えた／教わった。

太郎は花子に本を貸した／借りた。

太郎は花子に勝った／負けた。

太郎は花子に策を授けた／授かった。

太郎は花子に本をやった／もらった。

412 また、受動文か否かの判断を困難にさせることもある。「に」に前接する名詞が、能動文の動作の「着点」か、受動文の動作の「起点」か、受身の助動詞の有無を確認するまで決定できないことも多い。

太郎は花子に本を贈った／贈られた。

太郎は花子に道を尋ねた／尋ねられた。

太郎は花子に注意した／注意された。

ネコはネズミに噛み付いた／噛み付かれた。

のように、受身の助動詞が添加されれば即座に、受動文となる（したがって動作の方向が逆転する）ことも多い。

これらはいずれも、「太郎／ネコ」が「に」によって、起点とも着点とも解釈されることに起因する。

「要旨」および1で示した、近時、一部で慣用となっているかの感がある「打者に 本塁打を 浴びる」形式は、この格助詞「に」の、「着点を中心だが起点ともなる」性格のうち、「起点ともなる」ことが活用された結果である。

「浴びる」「浴びせる」の関係は、用例が多くはないものの、辞書や文筆家の例に従えば、おおむね、「投手が 打者から 本塁打を 浴びる」、あるいは「打者が 投手に 本塁打を 浴びせる」のかたちをとるものと考えられる。そして「に」と「浴びる」が違和感なく共起するのは、「外野（の守備位置）に 長打を浴びる」ような状況であろう。「に」は「着点」を示すものと理解されるからである。

しかし、「に」の「起点ともなる」ことを生かせば、「投手が 打者に 本塁打を 浴びる」も可能なのである。

「浴びる」「浴びせる」のように、使用頻度の高くはない——したがって「～を浴びる／浴びせる」以外の固定的表現が確立していない——動詞の場合、何らかの理由で、「打者に 本塁打を浴びる」形式が使用されれば、それが、文法的にも誤りではない——すなわち、「に」は「着点を中心だが起点ともなる」のだから——こともあって、ひとつの定型として容認されるのであろう。

42 「に」と「から」の関係

受動文の実質的動作主体を明示するとき、「に」と「から」あるいは「によって」のいずれを選択すべきか、問題になることがある。

しかし、そのほかにも、たとえば「教わる」「もらう」のような、対称関係の動詞（ここでは「教える／やる」）をもち、「受け手側」が「ダレが教わる／もらう」のように格助詞「が」で示される動詞の場合も、「に」と「から」の選択が問題となることもある。

421 「に」の優勢についていえば、稿者の意識では、受動文の実質的動作主体を明示するときは、「に」が優勢である。以下に例示する。

ありがたきもの 舅にほめらるる婿。また、姑に思はるる嫁の君。 (枕草子)
 我を頼めて来ぬ男、角三つ生ひたる鬼になれ、さて人に疎まれよ…略… (梁塵秘抄)
 名にし負はば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな (小倉百人一首)
 昔々浦島は助けた亀に連れられて竜宮城へ来て見れば…略… (文部省唱歌)
 牛に引かれて善光寺参り (ことわざ)

422 「から」の抬頭についても触れる。橋本進吉（1969. 156ページ）は室町時代の格助詞「から」について、

受身をあらはす用言につづいて、その動作をする人をあらはすものも出来た。

とし、例を示している。ここでは 2例を引用する。

漢カラ殺サレタカト思ヘバ (史記、七)

唯今そなたからくはれうず (伊)

この時代から、現代に至るまで、受動文の実質的動作主体を「から」で示すことが可能なのである。当然、「に」と「から」の選択に関しては、何らかの問題が生じるであろう（ただし、「カラ殺サレタ」「からくはれうず」が現代語としても適切であるかは、検討する必要があると考えている）。

423 対称関係の動詞の場合も考えたい。411 に示した、対称関係にある動詞の組み合わせのうち、「受け手側」の「教わる／借りる／もらう」については、稿者の場合、動作の起点は「に」「から」のいずれでも示せる（「授かる」については判断を保留する）。

牧野成一（2000）は、受動文の「に／から」の選択について、動作の起点を「ウチ」と認識すれば「に」が、「ソト」と認識すれば「から」が選択されるとする。しかし「に／から」とも可能と

考えられる「教わる」に関しては、(64)(65)でそれが説明できるか、疑問である。

(64) (鹿児島樟南高佐田投手) 野球はサトウキビ畑を営む祖父に教わった。

(2005・8・18 14面)

(65) 技術をどこで学んだかって？金型の技術は明治37年生まれのオヤジから教わった。

(金属工業技術者岡野雅行の談話 2005・9・28 32面)

ただし411に例示した「負ける」のほか、「受ける」も問題がある。「??太郎は花子から負ける」は不自然で、「に」が自然である。また「受ける」(対称関係の動詞は「贈る／送る／与える／授ける」が考えられる)の場合、「に」は不自然で、「から」が自然である。

??(66) (古美術蒐集家で、鎌倉時代初期のものと見られる「催馬楽」の発見者) 萬羽さんに連絡を受けて断簡を調べた久保木哲夫・都留文科大名誉教授は「…略…」と話す。

(2003・1・16 28面)

しかし、この(66)は、記者の内省とデスクのチェックを経て紙面に出現しているのである。このことから、「動作の起点(送り手)から 連絡を 受ける」のほか、「動作の起点(送り手)に 連絡を 受ける」も一部では許容されるらしいことが窺われる。

このように、対称関係にある動詞のうちで「受け手側」に立つ動詞についても、動作の起点(送り手)を「格助詞」で示すとき、選択範囲は一樣ではない。個人あるいは時代により、「に」と「から」の間の「垣根」に高低があるものと考えたい。

5 ま と め

以上の考察により、「要旨」に示した3点は説明できたと考える。「打者に 本塁打を浴びる」形式は、「に」の多様性と、「に」と「から」の間の「垣根の低さ」に基づき、一般的な「ドコに ナニを 浴びる」と「ドコから ナニを 浴びる(浴びせられる)」の間隙をぬうようにして生じたものと考えられる。

「浴びる」は「浴びせる」と対称関係にある。そして、12で示したが、「非難を浴びる」のように、ときには「受け手側」の動詞にもなる。このことが、「教わる」「もらう」などが、「に」「から」のいずれとも共起できることに倣って、「に」と「から」の間にあったであろう「垣根」を容易に乗り越えた結果と考えたい。

稿者のいささかの違和感のそれはそれとして、もはや、「打者に 本塁打を 浴びる」形式は、「誤用」として退けるには当たらない、それなりの存在理由があるものとすべきなのであろう。

【参考文献】

- 小泉 保 (1993) 『日本語教師のための言語学入門』
 橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』
 牧野成一 (2000) 「言語文化学」『別冊国文学現代日本語必携』

大修館書店
 岩波書店
 学燈社